

平成10年6月10日(水)

国立療養所鈴鹿病院療育研修会レジメ

「患者の高年齢化に対する療育的援助」

国立療養所西多賀病院

指導室長 阿部 幸泰

1：重症児、筋ジスの高年齢化の実状

別紙参照

1：「高年齢化」の私の基本的解釈

別紙参照

老人施設の現状（個々を人生の先輩として敬っていない）

1：筋ジス、重症児の「高年齢化に対する療育的援助」一事例を通して－

援助の基本－人を介さないと行動が人との関係拡大もできにくい存在－

自己決定－日々の係わり、野球観戦－

社会性－キップ購入、要望書作成、新聞配り－

家族と関係－結婚経験者の入所－

過齢後の学習の喜び

生活年齢の重み

1：患者のQOL向上－係わる側のQOLへの問い－

人の為「偽り」 人を憂う「優」 心を受け止める「愛」

1：交信行動から観た患者と職員の係わり（療育的援助の基本）（別紙参照）

職員が「言う」→患者が「行動する」→職員にとって（当然）のこと

→患者にその行動への職員から発信なし（黙っている）→行動のし甲斐なし

1：その他

全ての人間関係、社会問題に共通

職員は日々一瞬一瞬が勝負（患者は見抜く）、「生きる」スタンスが問われている。

← 厳しい仕事

互いに共震し合える人間関係を求めること、即仕事（収入）。

←数少ない「素晴らしい」職業

（一般的には、その「素晴らしさ」を求めるために、まず「金」が必要なため働く。）

福祉意識の今後（別紙参照）